

| | | | | |
|---------|--------------|-------|----|------|
| 氏名(本籍) | 李 | 鎮 | 洙 | (韓国) |
| 学位の種類 | 教育学博士 | | | |
| 学位記番号 | 博甲第402号 | | | |
| 学位授与年月日 | 昭和61年3月25日 | | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第1項該当 | | | |
| 審査研究科 | 体育科学研究科 | | | |
| 学位論文題目 | 花郎の体育に関する研究 | | | |
| 主査 | 筑波大学教授 | 教育学博士 | 成田 | 十次郎 |
| 副査 | 筑波大学教授 | | 渡辺 | 一郎 |
| 副査 | 筑波大学教授 | | 糸野 | 豊 |
| 副査 | 筑波大学助教授 | 教育学博士 | 山本 | 恒夫 |
| 副査 | 筑波大学助教授 | | 中司 | 利一 |

論 文 の 要 旨

本論文は、以下の各章から構成されている。

第1章 序論

第2章 花郎の制度と特質

第3章 花郎の体育の目的

第4章 花郎の体育の方法

第5章 結論

(注)

引用・参考文献

第1章で述べてあるように、この論文は、6世紀から10世紀にかけて、新羅に存在していた青少年組織、花郎の体育を、文献及び考古学的資料によって、全体的に明らかにすることを研究の目的としている。

そして、この研究のねらいを達成するために、これまでの諸研究の検討をとおして1. 花郎の制度と特質、2. 花郎の体育の目的、3 花郎の体育の方法を明らかにすることを研究課題としており、この課題にそって、各章が構成されている。

なお、結論の章では、本論文の要約とともに、花郎の体育の体育史的意義についても、考察を試

みている。

「花郎の制度と特質」の章では、花郎の起源や理念や組織、及び花郎の教育とそこにおける体育の意義が明らかにされている。

すなわち、花郎は原子時代の成人式、あるいは巫的要素をもつ祭りに源をもち、韓国固有の生活様式から発生した「ドウレ」の影響をうけ、6世紀の新羅において組織化された青少年の組織で、小国新羅が三国時代の難関を打開するための人材養成・登用の役割をはたしたこと、花郎の根本理念は韓国の伝統的な光明思想であり、花郎という言葉そのものが、この思想の具現者にふさわしい名称であったこと、花郎の組織は上流貴族出身の1人の花郎と良家の多くの未婚子弟である郎徒たちによって構成され、その規模は数百から数千人にわたるものまであり、朝廷には花郎組織を統轄する花主がいたこと、この組織は6世紀に始まり、7世紀を盛時として、10世紀まで存在していたことが明らかにされている。

また花郎の教育は、尽忠報国、孝、信などの倫理を主とする道義教育、情操を育てる歌舞教育、そして体育によって構成されていたが、それらの間には必ずしも明確な区分をもつものではなかったこと、これらの中でも、身体の修練や身体運動による教育、つまり体育が、武人の形成という点で重視されていたことを明らかにしている。

「花郎の体育の目的」の章では、身体修練や身体運動によって、どのような人間を育成しようとしていたのかが明らかにされている。

すなわち、韓国ではそれまで・強壮な体格や体力、身体のたくみさなどという形態や諸能力が、有用性という見地から社会的に高い評価を得ていたのであるが、花郎においては、そのような有用性をこえて、美しい身体や靈力などの追求が重視されていたこと、花郎の理想像は、身心不分離論や光明思想にもとづく、身と心の調和がされた全人であったが、具体的には、新羅社会が求めた優れた上流武人であったことが明らかにされている。

「花郎の体育の方法」の章では、優れた上流武人に具体化する理想的な人間形成という花郎体育の目的を、どのような方法で実現しようとしていたかを、具体的に明らかにしようとしている。

すなわち、花郎においては、身体に苦痛を与え、これに絶える苦行や冬期の禡、深山への単独入山による厳しい修行などによって、靈力を備え、歌舞、遍歴、蹴鞠、狩猟、あるいは剣術、弓術、馬術などによって、強壮で美しい体格や体力、戦闘技術を身につけようとしていたことが明らかにされている。

また、花郎の体育は、新羅社会の構造を反映して、対立競争的なしくみで行われていたこと、彼らは主に僧侶によって教養を、長老によって秘儀を、先輩たちによって体育を指導され、互いに競いあって国に有能な武人になろうと努力していたこと、花郎の修行や訓練は、人工的に設置された施設ではなく、自然の中で行われていたことが明らかにされている。

さらに、花郎においては、弓箭法という武術試験や、運動中での人物の性格、賢愚の判別法、遍歴などにかかわる観察能力・判断能力などを試す問答法によって、人物評価が行われていたが、これは新羅の人材登用の方法として用いられていたことも、明らかにされている。

「結論」の章では、まず、この研究で明らかにされたことを要約し、ついで、花郎の体育の体育史的意義について、二つのことを述べている。

その第一は、古来韓半島において、主に有用性という見地から、機能強化をねらって実施されていた伝統的な身体修練や身体運動が、花郎においては、身体不分離論的身体観にもとづいて、心と体、強さと美しさが調和した人間（武人）の形成を目的として行われるようになったこと、つまり、近代的な体育の萌芽ともいえるものが、新羅社会にみられたということである。

第二は、このような花郎の体育の思想や実践は、花郎制度の衰退とともに消えるが、それ以後も、国の非常時には、「花郎道」とともにくり返して強調され、一度は12世紀の高麗王朝によって復興されるが、直ちに消滅し、近代体育の登場によって、その思想の実現をみたということである。

審 査 の 要 旨

「花郎道」という言葉は、「武士道」や「騎士道」に類するものであって、韓国人の精神的支柱であり、体育と深いかかわりをもっているにもかかわらず、その母体である花郎の体育については、これまで研究されたものはなかった。本論文は、花郎の組織とそこでの体育の役割、その体育の目的と方法を明らかにすることによって、花郎体育の全体像を始めてとらえたという点に、大きな意義が認められる。

新羅花郎に言及した原典資料は限られているだけに、この研究に際しては、考古学的資料や国内外の民族・民俗学的研究文献の研究が重要であるが、この論文では、それらを精力的に検討し、全体像を明らかにすることに相応の成果をあげている点も、評価される。

この研究によって、花郎においては、その発生時から、身体の訓練にかかわる問題が、基本的に重要な意味を有していたのであるが、修練をともなう求道的な体育が美的な体育と融合していた点を指摘している点は、韓国体育だけでなく、東洋的な体育の特質を考える上で示唆を与えるものといえる。

また、多くの資料を比較検討しながら、身体の修練や訓練の方法を具体的に描き出そうと努力している点も、評価できる。

しかし、若干の問題点も指摘される。6世紀から10世紀にかけての花郎の体育の推移については、十分明らかにされているとはいえない。また、組織や体育の方法についても、具体性に乏しい部分がある。それに、時どき情緒的な記述がみられる。しかし、これらは資料の限界や今日の韓国体育の課題に応えようとする著者の問題意識を考慮すれば、許される範囲のものといえよう。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。